

平成 22 年 5 月 30 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20720174

研究課題名 (和文) 近代日本における大名華族—士族と地域社会

研究課題名 (英文) A Study of Relation between Feudal lord peer, Shizoku and Regional Society in Modern Japan

研究代表者

内山 一幸 (UCHIYAMA KAZUYUKI)

日本福祉大学・知多半島総合研究所・研究員

研究者番号：80454411

研究成果の概要 (和文)：本研究は、元殿様である大名華族と旧家臣である士族の両者の関係が地域社会の近代化に果たした役割の一端を解明しようとしたものである。この問題の事例研究として、旧柳河藩主家の当主立花寛治がなぜ旧藩領に農事試験場を建設したのかを検討した。その結果、この時期の大名華族は旧藩領の発展よりも国家の利益を優先する意識があったこと、また士族たちもその考えに理解があったことを明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：The relation between both of the feudal lord peer and the shizoku started clarifying a part of the accomplishment role to the modernization of the regional society by this research. I examined why Count Kanji Tachibana of the former Yanagawa feudal lords built the agricultural experimental station in the old clan territory as a case study of this problem. As a result, the feudal lord peer at this time clarified that there was consideration to which it gave priority to the profit of the nation rather than the development of the old clan territory, and shizoku also had understanding moreover in the idea.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：日本近現代史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：大名華族、士族、旧藩

1. 研究開始当初の背景

これまで旧藩主ないし華族をめぐる歴史的な位置づけは政治史および経済史の分野で議論が深められてきた。前者は貴族院議員やその選出母体となる華族制度について(大久保利謙『華族制の創出』吉川弘文館、1989年)であり、後者は華族資本をめぐる研究(千田稔「華族資本の成立・展開」『社会経済史学』52-1、1985年)である。これらは総じて華族という明治期に新たに彼らに付与された属性を特徴づける研究であると言えよう。それらに比してこれまで検討されてこなかった旧藩主(家)の近世からの連続性を問う議論については近年までほとんど見られなかった。その理由は大名華族に関する史料状況によるところが大きかったと言える。したがって大名華族の研究に着手するためには、最初に史料状況を改善させる作業が必要であった。

このような問題点を克服するため申請者は福岡県柳川市の柳川古文書館に寄託されていた「旧柳河藩主立花家文書」の未整理の近代史料群に着目した。同文書群を素材とした理由は、数少ない利用可能な旧藩主家文書であること、さらには当主が明治前期に旧藩領へと移り住むという同家の特徴が大名華族と地域社会を考察する上で最適な素材であると考えたからである。

申請者はこれまでに文書群の整理を行いつつ、以下の基礎的な研究を行ってきた。

(1) 旧藩主家家政と旧家臣団秩序の実態分析

大名華族を「家」という観点から組織体として捉える(以下、組織体としての大名華族を「旧藩主家」と記す)ことで、旧藩主家における意思決定の複雑なシステムとその変容を解明し、さらに旧家臣団秩序の再編について論じてきた。具体的には旧藩主家の意思決定に携わった主体とその人的構成の変化を検討することにより旧家臣団秩序の変化を明らかにした。

(2) 旧藩主家史料学の構築

柳川古文書館における「旧柳河藩主立花家文書」の目録化事業に3年間にわたり中心メンバーとして参画し、『旧柳河藩主立花家文書調査報告書』を上梓した。同報告書は、立花家が所蔵していた総数約37,000点の文書を目録化したものである。

(3) 旧藩主家の近代史料の所在調査

国内の大名華族に関する近代史料の所在確認作業を行ってきた。また近代史料を所蔵する旧藩主家の現当主に対しても面接調査を行った。このような調査の過程で、大名華

族の近代史料公開へ向けた人的ネットワークを形成してきた。

2. 研究の目的

よく知られるように、前近代においては封建関係のもと藩主一家臣はひとつの「家」＝武士団を構成していた。これまでの研究では、彼らは明治2年に華族と士族へと再編され、その結果、藩主一家臣の関係は解体されると説明されてきた。しかし近年の研究では、その解体は一挙に進まなかったことが指摘される。そのような見解を踏まえるならば、武士団から華族・士族へという単線的な説明ではなく、前近代の藩主一家臣の関係を引き継ぎながら、近代において武士団がどのような形へと「再編」されたのかを問う必要がある。さらにはその関係性が地域社会の近代化にどのような役割を果たしたのかを解明できれば、日本の近代化をめぐる議論に新たな知見を提示することができよう。

このような問題意識のもと、本研究においては明治10年代における大名華族—士族と地域社会の関係の検討を行う。その実像に迫るために申請者は「旧柳河藩主立花家文書」を中核史料として用いた。同史料群を取り上げた理由は、個別事例のレベルにまで踏み込まなければ大名華族—士族と地域社会の関係の実態が把握できないこと、また申請者が同史料群の利用に習熟しているからである。なお研究対象を明治10年代に限定するのは、明治14年の国会開設の詔が彼らのナショナリズムに与えたインパクトを重視するためである。

以上の問題関心に基づき、本研究においては明治10年代における大名華族—士族と地域社会の関係を検討する。具体的には、旧藩主家をめぐる近世以来の漸進的変化と近代以降の急進的な変化の二つの要素に着目しながら、旧柳河藩主立花家の当主立花寛治が行った農事試験場の建設をめぐる問題を検討する。上記の問題をクリアするために具体的には次の課題を設定する。(1)農事試験場設立をめぐる基礎的な事実関係の解明、(2)立花寛治の農事試験場設立過程から見た明治10年代における大名華族の現状認識と自己認識の抽出、(3)明治10年代の大名華族と士族における自己認識の差異と類似性の比較検討。これら課題を、大名華族ないし旧藩主家を組織体としての家という視点で捉えること、さらには大名華族と士族のナショナリズムに着目することによって完遂する。

3. 研究の方法

元殿様である大名華族と旧家臣である士族の関係は、従来、明治維新により断絶するものと捉えられてきた。しかし後藤致人(「明治における華族社会と士族社会」『文化』60-3、4、1997年)によって、両者の関係が継続することが指摘された。もっともその具体的な様相についてはこれまで全く未解明であったと言える。このような研究状況に対して、本研究ではこれまで十分に活用されてこなかった大名華族側の史料を用いることにより、大名華族—士族の関係の実態を明らかにする。さらにその両者の関係が旧藩領という地域社会に対してどのような影響を及ぼしたのかを検討する。

この問題を検討するにあたり、本研究では旧柳河藩主立花家の当主立花寛治による農事試験場建設事業を事例として取り上げる。この事業を検討する理由は次の3点にある。(1)立花家は旧藩石高約11万石の中規模の藩であり平均的な大名華族に相当するため、本事例から大名華族像の一般化が図れること、(2)立花寛治は旧藩領に私財を投じて明治10年代に農事試験場を建設しており、華族の中でも最初に地方に農事試験場を築いた事例であり、大名華族による地域社会に対する社会貢献事業としては早期の部類に該当すること、(3)「旧柳河藩主立花家文書」からは、大名華族個人を取り巻く社会集団、具体的には親族や様々な階層の士族たちによる干渉や後押しなどの抽出ができ、さらに同事業の展開を立花寛治自身による草稿などから読み解くことできる。このような作業を行うことでこの問題を明治10年代という国内情勢の中で捉えられれば、同時代の複雑な社会情勢が大名華族の自己認識や活動をどのように規定していたのかを具体的に明らかにされよう。

以上の課題を解決するために次のような方法を用いる。

第一に、大名華族ないし旧藩主家を組織体としての家という視点で捉えることである。申請者はこれまで個別論文において旧藩主家の意思決定の仕組みを素描してきたが、そこには親族や家政担当者、旧藩士など複数の主体が関与しており、その仕組みも目まぐるしく変化している。そのような複雑な意思決定の過程の存在を前提とすることにより、(1)当主個人の説明の場面が生じることで、大名華族の現状認識や自己認識に迫ることができる、(2)旧藩主家の当主の活動に対する旧藩士たちの反応を捉えることが可能と

なる、という利点がある。

第二に、大名華族と士族のナショナリズムに着目する。近年の地域研究の成果である中村尚史氏(「後発国工業化と中央・地方—明治日本の経験」〈東京大学社会科学研究所編『20世紀システム4開発主義』東京大学出版会 1998年)や布施賢治氏(『下級士族と幕末明治』岩田書院、2006年)らの指摘によれば、明治10年代において地方開発から明治国家を支えようとするナショナリズムに基づく富国論の存在が指摘されている。上記の議論は士族に限ったものであるが、大名華族である立花寛治の農事試験場設立構想もこのような文脈とは切り離せないと考える。

上記の観点から、2ヶ年にわたり以下の点について史料の収集と問題の検討を行った。

初年度においては、立花寛治による農事試験場設立の過程を重点的に検討した。具体的には、

(1)立花寛治の個人的な履歴の解明を行う。寛治については昭和4年に刊行された『立花寛治伯』(福岡県社会教育課)によっておおよその履歴は明らかにされているものの、一次史料に基づいた履歴はほとんどわかっていない。とりわけ本研究との関係において重要となる農学を専攻した理由や、農事試験場建設の動機を「旧柳河藩主立花家文書」に含まれる立花家の家政を担当者たちの書翰の綴と日記から明らかにする。

(2)立花寛治に対して影響力を及ぼしたと考えられる者たちが彼に対してどのような働きかけを行ったのかを検討する。この問題については、立花寛治に宛てられた書翰の分析を行う。特に寛治の親族(旧一宮藩主加納久宜、旧三池藩主立花種恭)の書翰および、農政関係者からの書翰を中心に検討する。

次年度においては立花寛治の認識をめぐる問題について検討する。

(1)立花寛治の大名華族としての自己認識の検討。これについては立花寛治の御手許史料と呼ばれる文書を検討する。この文書群は寛治が作成した様々な私的・公的文書であるが、これらの中には寛治自身が親族や家政担当者らへ試験場構想に至る自らの考えを説明した作成した覚え書きや意見書の草稿などが含まれる。これらを読み解くことにより、農事試験場設立期に立花寛治が置かれていた状況を把握し、ひいては明治10年代における大名華族の現状認識と自己認識の抽出を行う。

(2)農事試験場構想に対する旧藩士の反応の検討。地域開発をめぐる大名華族と士族のナショナリズムの差異と類似性の双方に着目

しながら、「旧柳河藩主立花家文書」中にある立花寛治宛岡田孤鹿の意見書や柳川古文書館に所蔵される旧柳河藩士吉田孫一郎の日記を検討する。彼らは旧柳河地方において郡長や県議会議員をつとめるなど地域社会において重要な位置にあった。彼らを比較検討の素材とすることで、明治10年代の大名華族と士族における自己認識の差異と類似性について明らかにする。

4. 研究成果

上記の研究方法によって近代日本における大名華族—士族と地域社会との関係において以下の成果が得られた。

(1) 大名華族の現状認識と自己認識

立花寛治の旧藩領における農事試験場建設事業は、彼の強い華族意識に根ざした行為であったことが明らかとなった。具体的には華族たちが抱いていた明治国家の貿易赤字に対する危機感と、来る明治23年の国会開設の際に自身が上院議員に就任できなかった場合の代替行為という二点が動機となっていた。さらに建設に至る過程を分析すると、農事試験場建設場所も旧藩領が自明のものではなかったことが判明した。

(2) 士族の反応

方法論は多様であるが、原理的には立花寛治の富国の実現をめぐる議論はおもだった旧藩士たちにも共有されていた。家政の担当者も国家の現状に対する危機感を抱いており、その対応策の一つとして寛治が農学に基づいた事業を行うことに賛同していた。ただし、一部の旧藩士は農事よりも地域の鉄道建設に資金を投じるよう寛治に対して意見書を提出した。興味深いことにその内容はナショナリズムに基づく富国の実現については寛治の考えとほぼ同じ論理構造となっており、方法論が異なっていたことが明らかとなった。

(3) 大名華族と地域社会の複雑な関係と今後の課題

上記のごとく、本研究においては大名華族自身の意識と行動は、必ずしも旧藩領の発展のみを意識していたわけではないことが明らかとなった。これは大名華族ないし旧藩主家は旧藩領とは全く没交渉ではなかったというこれまでの研究とどう整合的に説明するかという新たな課題を提起している。

その問題の解決手段の一つとしては、大名華族自身の意識の変化を捉えるという方法が考えられる。また別な方法としては、この課題を筆者のこれまでの個別の論文を上記

の成果のなかに位置づけた時、大名華族と地域社会の関係は複数の経路によって成り立っていたと考えられるのではなかろうか。またその際に個々に浮かび上がってくる地域社会や旧藩のイメージは必ずしも一致していないと考える。別言すれば、大名華族というフィルターを通じて浮かび上がってくる地域社会なる対象は様々な形状をしており、それらと大名華族との関係もまた複雑であったと思われる。したがって大名華族と地域社会の関係を検討する上で次に行うべき課題は、その複雑さを丹念に捉えることであると言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①内山一幸、「明治前期における大名華族の意識と行動—立花寛治の農事試験場建設を事例に一」、『日本史研究』576、査読有、2010年、掲載確定

②内山一幸、「明治二十年代における旧藩主家と地域社会—私立尋常中学橋蔭学館問題を事例に一」、『日本歴史』723、査読有、2008年、55-70p

[学会発表] (計2件)

①内山一幸、立花寛治における華族意識と旧藩主意識、九州史学研究会、2009年10月18日、於九州大学国際ホール(福岡県)

②内山一幸、大名華族と旧藩領—立花寛治の農事試験場建設を事例に一、近現代史研究会、2008年5月31日、名古屋大学文学部(愛知県)

[図書] (計1件)

①内山一幸、他、柳川市史別編 図説立花家記、2010年3月、柳川市、320~341p

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内山 一幸 (UCHIYAMA KAZUYUKI)

日本福祉大学・知多半島総合研究所・研究員

研究者番号：80454411